

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 同じ目標を共有する教師から 明日への力をもらった

新潟県立新潟高校 平山 剛 HIRAYAMA TAKESHI

学力も進路観もさまざまな生徒に向き合う教師だからこそ、抱える苦しみはときに大きなものとなる。日々の取り組みの見直しと、同じ目標を共有し合える仲間の大切さを知る一人の教師が、自らの成長を振り返り、果たすべきこれからの役割について語る。

## 自分なりの授業を模索



英語教師として初めて教壇に立った日から20余年が経ちまし

た。今日まで私を育ててくれたのは、喜びも苦しみも語り合える教師たちだと思います。

初任校の生徒は進学希望者ばかりではありませんでしたので、受験以外の動機付けを行い、英語を学ぶ面白さを実感させる必要がありました。しかし、経験の浅い私が行っていた授業は、生徒の前でただやみくもに英語を話し、ゲームなどで時に盛り上がることはあれ、深まりのないものでした。生徒に英語を使う喜びや自分で勉強する方

法を十分示していたとは言えない、一方的な授業だったのです。

私は教科内外の同僚に授業の悩みを打ち明けました。さまざまなヒントをもらい、それを実践していききましたが、自分なりの授業の骨格を作り上げるのは容易ではありませんでした。

教職2年目、同僚に誘われ、ある研究会に参加しました。月1回、県内の有志が集まり、英語教育法に関する原書を読んで意見交換したり、授業の実践報告をしながら最新の理論を学んでいくその会はとても刺激的でした。そして、それ以上に印象的だったのが、夕方から行われる懇親会でした。皆それぞれが理想の授業の創造を目指していて、暖かい雰囲気の中で真剣に

意見交換をする場でした。

回を重ね、多くの先生方とそれぞれ勤務校での日々を語り合えるようになった頃、ここは「肩ひじ張らず何でも話し合える場」でもあることに気が付きました。どんな仕事、どんな職場にも苦労はある。それを自分の内面に隠すことなく、仲間と共有し、一緒に向き合う。そうすることで、また明日から頑張ろうとそれぞれの職場に戻っていくことが出来たのです。

会の中心メンバーの一人で10歳年上の永村邦栄先生ともいろいろな話をしました。懇親会のあと、先生の部屋に泊めてもらったり、先生の当時の勤務校で授業を見せてもらったりしたこともあります。永村先生は、

自分の経験を率直に語ってくださいました。もちろん、永村先生の取り組みをそのまま真似しても、うまくいくとは限らないことは分かっていました。答えは自分で探さなければいけないけれど、それでも永村先生に話を聞いてもらい、「オレもそうだったよ」と共感してもらえただけで、力が湧いてきたのです。

## チーム力を高めたい

初めて永村先生とお会いしてから十数年が経ち、2007年からは一緒に働くようになりました。駆け出しの頃の大先輩と机を並べるのは不思議な感覚ですが、先生が生徒や他の先生と話しているのを間近で聞くだけでも勉強になります。

## 先輩教師の言葉

生徒の  
気持ちが向く  
授業を目指す

新潟県立新潟高校  
EIMURA KUNIEI 永村邦栄



研究会は誰もが気軽に悩みを話せる場でもありました

た。「実は自分もそうだった」の一言に癒されることもよくありました。また壁をどう乗り越えたかを共有することで、悩んで堂々巡りしていただけの自分が一歩前進できたりましたのです。

話題の中心はやはり「どうやって生徒の気持ちを授業に向けさせるか」でした。例えばアルファベットや語順が身に付いていない生徒に、中学校と同じようなやり方でそれらを教えては、プライドを傷つけてしまう。生徒の精神年齢に相応しい内容や活動を通して英語を学習させ、検定試験にも合格させるなどとして、自信を持たせる。そのため

左 ひらやま・たけし 英語科。初任は佐渡島にある両津高校。同校に3年間勤務した後、国際情報高校、高田高校を経て、03年より新潟高校に勤務。

右 えいむら・くにえい 英語科。初任は佐渡島にある相川高校の高千分校（現在は相川高校に統合）。その後、黒埼高校、新潟南高校、巻高校を経て、07年より新潟高校に勤務。

撮影◎新潟高校にて

私の関心は今も変わらず、生徒を授業でどう惹き付け、自ら学ぶ姿勢を身に付けさせるかという事に尽きます。進学校の生徒といえども、「Independent Learner（自立した学習者）」に育てるためには、学びの感動と実感が必要です。それが与えられなければ教師が教室にいる意味はありません。そのためには教材研究が不可欠ですが、いつ

もうまくいくとは限りません。そんなとき永村先生の授業を見学しながら、自分は生徒目線に立った教材研究が出来ていたのかと自問します。十分に教材を研究したつもりなのに、なぜ授業がうまくいかなかったのか。生徒のせいではなく、自分の準備に原因があると考えて改善点を見いだした上で、次の授業に臨むようにしています。

今年で私は45歳になりました。職場での人と人のつながりをコーディネートする役目を担う年代になってきました。教師同士が高め合える集団になっていくためにどうすれば良いか、そのヒントも永村先生から学んでいきたいと思っています。

今、高校教育の現場には、昔以上にチーム力が求められています。私たちは、組織として力を発揮することをもっと意識する必要がありますのではないのでしょうか。しかし、だからといって過度に身構えることもないと思います。日々の何げない言葉のやりとりを心掛けるだけで、私たちはたくさんのことを分かり合えると信じています。20年前がそうだったように、これからも同僚と喜びや苦勞を分かち合っていきたいと思っています。

工夫や努力が必要だといったことも、研究会で学びました。どんな高校の生徒でも、子どもの人格を尊重し、現在のレベルより一段階上のレベルの学習を課し、それを達成させ、自信を付けさせることが出来れば、子どもの気持ちは自然と授業に向くものです。

私たち公立高校の教師の使命は、優秀な生徒も勉強でつまずいている生徒も、誰もが一人で学び生きていけるように育てることです。最初は手を引いて導きながら、いつの間にか一人でも出来るようにさせる。いつまでも教師や親が、生徒やわが子のそばにいてやれるわけではないのですから。そのためには、生徒の気持ちに授業に向いている必要があります。

同じ高校に勤務するようになり、平山先生の授業をいつでも見ることが出来ます。生徒とのキャッチボールがうまく、1時間があつという間に経ちます。目の前の一人ひとりに語りかけながら、他の全員に「先生は自分に語っている」と思わせる目配りと気配りは見事です。生徒は先生を信頼して授業に集中しています。着実に「Independent Learner」が育っています。